

難船小僧

夢野久作

青空文庫

船長の横顔をジッと見てみると、だんだん人間らしい感じがな

くなって来るんだ。骸骨を渋紙しぶがみで貼り固めてワニスで塗上げた

ような黒いガツチリした凸額おでこの下に、硝子球ガラスだまじみたギョロギョ

ロする眼玉が二つコビリ付いている。マドロス煙管パイプをギュウと引ひ

唧つくわえた横一文字の口が、旧式軍艦の衝角しょうかくみたいな巨大な顎あご

と一いっしょ所に、鋼鉄の嚙締機バイトそつくりの頑固な根性を露出むきだしている。

それが船橋ブリッジの欄干クロスに両肱ひじを凭もたせて、青い青い秋空の下に横た

わる陸地おかの方を凝視みつめているのだ。

そのギロリと固定した視線の一直線上に、巨大な百貨店らしい

建物の赤い旗がフラフラ動いている。その周囲に上シャンハイ海の市街まち

が展開している上をフウワリと白い雲が並んで行く。

……といったような無事平穩な朝だったがね。昭和二年頃の十月の末だったつけが……。

足音高く船橋ブリッジに登って行つた俺は、その船長おやしの背後うしろでワザと足音高く立停まった。

「おはよう……」

と声をかけたが、しぶがみづら洩紙面は見向きもしない。何しろ船長仲間でゆびおりも指折の変人だからね。何か一心に考えていたらしい。

俺は右手に提げた黄色い、四角い紙かみづつみ包を船長の鼻の先にブラ下げてキリキリと回転させた。

「御註文の西チベット蔵紅茶です。やツと探し出したんです」

船長はやつと吃驚おやし びつくりしたらしく首を縮めた。無言のまま六尺豊しやく

かの長身をニユーとこつちへ向けて紅茶を受取った。

「ウウ……機関長おやかたか……アリガト……」

とプスリ云った。コンナ時にニンガリともしないのがこの渋紙船長の特徴なんだ。取付きとりつの悪い事なら日本一だろう。こんな男には何でも構わない。殴られたらなぐり返す覚悟でポンポン云ってしまつた方が、早わかりするものだ。

「……昨夜ゆんべ、陸上おかで妙な話を聞いて来たんですがね。今度お雇いになったあの伊那いな一郎いちろうって小僧ですね。あの小僧は有名な難船小僧いわっていう曰く附きの代物しろものだつて、皆みんな、云つてますぜ」

俺はそう云いさしてチョックラ船長おやしの顔色を窺うかがつてみたが、何

の反応も無い。相も変わらず茶色の謎語像スフィンクスみたいにならずスリしている。無愛相ぶあいそうの標本だ。

「あの小僧が乗組んだ船はキツト沈むんだそうです。I・I・N・Aアイ・イン・ナって聞くと毛唐けとうの高級船員なんか慄ふるえ上るんだそうです。乗ったら最後どんな船でも沈めるってんでね。……だから今度はこのアラスカ丸あぶねが危えってんで、大変な評判ですがね。陸上おかの方では……」

これだけ云っても船長の洩紙面は依然として洩紙面である。ネービー・カットの煙けむをプウと吹いた切り、軍艦みたいな顎あごを固定してしまった。しかし黒い硝子球ガラスだまは依然として俺の眼と鼻の間をギョロリと凝視している。モット俺の話を聞きたがっているら

しいんだ。

「あの小僧は小^{ちつ}ちやくて容^{よう}姿^すが美^いいので毛唐^{もうたう}の変^す態^け好^べ色^え連中^{れんちゆう}が非常^{ひじょう}に好^すくんだそうです。あの小僧^{しょうそう}も亦^{また}、毛唐^{もうたう}の高^{ハイ}級^{クラス}に抱^かかれ
るとステキに金^{もん}が儲^もかるんで、船^{ふね}にばっかり乗^のりたがるんだそう
ですが、不思議な事^{こと}にあの小僧^{しょうそう}が乗^のった船^{ふね}で、沈^{しず}まない船^{ふね}は一艘^{そう}
も無いんだそうです。初めてあの小僧^{しょうそう}を欧州航路^{ちやうしやう}に雇^や傭^{きよう}した郵
船^{ゆうせん}のバイカル丸^{ばいかるまる}が、ジブラルタルで独逸^{ハイン}のU何号^{うなごう}かに魚雷^{イキイモ}を喰^く
わされた話は誰^{たれ}でも知^しっているでしょう。そんな時に漂流端舟^{ながれはうたふね}に這^は
い上^あつてハンカチを振^ふったのが彼小僧^{あいつ}のS O Sの振出^{ふりだ}しだそうで
すがね。……それから第二丹洋丸^{だいにんやうまる}がスコタラ沖^{おき}でエムデンにアツ
パーカットを喰^くわされた時も、あの小僧^{しょうそう}は丁度^{ていど}、新式救命機^{しんしききうめい}の着

込み方のモデルにされていたところだったそうで、そのまんま飛込んで助かつちまったんだそうです。……まあ運の良い奴といえはいえましようが、彼あいつ小僧の運が良いたんびに船全体の運命がメチャメチャになるんだから敵かないません。……まだ他にも二三艘、大きな船を沈めているんだそうですが、そんなに大きな船でなくとも、チョット乗った木葉船こつばふねでも間違はなく沈めるつてんで、迎とてすこも凄がられているんです。早い話が房州通がよいの白鷺丸しらさぎにチョイと乗組んだと思うと、直ぐに横須賀の水雷艇と衝突させる。毛け唐とうの重役の随伴おともをしてブライトスター石油社オイルの超速自働艇モーターていに乗ると羽田沖で筋斗返りとんぼを打たせるといった調子で、どこへ行つても泣きの涙の三りんぼう扱いにされているうちに、運よく神戸で

エムプレス・チャイナ号のAクラス・ボーイに紛れ込んで知らん
 顔をして上海まで来た。そいつを、どこかで伊那の顔を見識みしつて
 いた毛唐の一等船客が発見して、あの小僧ボーイと一所なら船を降りる
 と云つて騒ぎ出した。そこで今度は事務長が面喰めんくらつて、早速小
 僧を逐出おいだしにかかったが、小僧がなかなか降りようとしな。食
 堂の柱へ噛かじり付いて泣き叫ぶ奴を、下級船員が寄つてたかつて、
 拳銃ピストルや鉄棒パイプを突つき付けてヘトヘトになるまで小突きまわして、泥
 棒猫でも逐おい出すようにして棧橋へたたき出してしまった。そこ
 で小僧はエムプレス・チャイナの給仕服ユニフォームのまま生命いのち辛から々の手バ
 スケットひとつひとつ提籠一個を抱えて税関の石垣の上でワイワイ泣いているのを、
 チャイナ号の向い合わせに繫留かかつていたアラスカ丸の船長……貴あ

下^なが^{みつ}発^け見^みて拾^ひい上^あげた……チャイナ号へ面^つ当^らみ^あたいに小僧の頭を撫^なでて、慰^{なぐさ}め慰^{なぐさ}め拾^ひい上^あげて行^いつた……という話なんです。現在、陸^お上^かでは酒^の場^{みや}でも税^{ぜい}関^{かん}でも海^ふ員^ねの奴^{やつ}等^らが寄^よると触^{さわ}るとその噂^{うわさ}ば^つつかりで持^も切^ちつてま^ます^きぜ。アラスカ丸の船^お長^{やじ}はそんな日^いく^わ因^{いん}縁^{えん}、故事来歴附の小僧だつて事を、知^しつて拾^ひつたんだか……どうだかつてんでね。非^ひ道^どい奴^{やつ}はアラスカ丸が日本に着^きくままでに沈^{しづ}むか、沈^{しづ}まないかつて賭^かけをしてる奴^{やつ}なんか居^ゐるんですぜ」

俺は元来デリケートに出来た人間じゃない。君^{きみ}等^らみ^みたいな高等常識を持^もつた記者諸君に「海上の迷信」なんて鹿^{しか}爪^{つめ}らしい、学者振^ふつた話なんか出来る柄^へじゃ、むろんないんだ。尤^もも若^{わか}いうちは不良の文学青年でバイロンの「海の詩」なんかを女学生に暗^{あん}し

誦よして聞かせたりなんかして得意になつていたもんだがね。し

かしそれから後のち、永年荒っぽい海上生活を続けて来たお蔭で性しょう

根ねが丸で變つてしまった。身体からだこそこんなに貧弱な野郎だが、

きようじようもちぞろ

兇状持揃うでづしいの機関室でも、相当押え付けるだけの腕ツ節と

度胸だけは口幅くちはばつたいが持つているつもりだ。現に船員連中か

ら地獄の親方と呼ばれている位だ。……けども、その俺が、この

渋紙船長おやしの前に出ると、出るたんびに妙に顔負けしてしまう。い

つもこうしてペラペラと安っぽく喋舌しゃべらせられるから妙なんだ。

しかも忠告する気で云っている話が、ツイお伽話ときばなしか何ぞのよ

うにフワフワと浮付うわついてしまう。圧おしの利かない事夥おびただしい。

「何も御幣ごへいを担ぐんじやありませんがね。そんな篋棒べらぼうな話が在あ

るかつて反対もしてみたんですがね。今まであの小僧が乗った船が一艘残らず沈んだのが事実だったら、今度沈むのも事実に違いない。乗組員全体の生命いのちにも拘かかわる話だ。何もあの小僧が居なければ船が出ねえって理窟りくつもあるめえし……お前めえんとこの船長おやじがいくら変かわりもの者だってそんな無鉄砲な酔狂をして乗組員を腐らせるような馬鹿ばかでもあんめえ。あの小僧の曰いわく因縁、故事来歴を知らねえから平気で雇ったに違ちがえねえんだ。悪い事こたあ云わねえから早く船長おやじに話して、あの小僧を降してもらいな。多人数おおぜいの云う事こたあ聴きいとくもんだ。あとで必定きつと後悔するもんだから……てな事を皆みんなして色々云うもんですからね……ハハハ……」

船長の表情は依然として動かない。渋紙色の仮面マスクが、頭の上の

青空に凍り付いたように動かない。無表情もここまで来ると少々精神異状者^{きちがい}じみて来る。俺は思い切りブツカルように云った。

「今の中に降^{うち}しちやったらどうです」

船長の左の眼の下にピクピクと皺^{しわ}が寄った。同時に片目を半分ほど細くして、唇の片隅を上の方へ歪^{ゆが}めた。これがこの船長^{おやし}の笑い顔なんだが、知らない人間が見たらとても笑い顔とは思えない。単なる渋紙の痙攣^{ひっぱり}としか見えないだろう。

「郵船名物のS・O・S・BOYだろう」

と船長^{しやが}が哽れた声でプツスリと云った。同時に眉^{まゆ}の間と頬^{ほっ}ペタの頸筋^{くびすじ}近くに、新しい皺が二三本ギューと寄った。冷笑しているのだ。

「エヘッ、知ってるんですか。貴方あなたも……」

「ムフムフ……」

と船長が笑いかけて煙草たばこに噓むせた。船橋ブリッジから高らかに唾液つばを

吐いた。

「ムフムフ、知らんじやったがね。皆みんな、そう云うとる」

「皆みんなつて誰がですか。どんな連中が……」

「船中ふねじゅうで云うとるらしい。水夫かねの兼の野郎が代表で談判に來

た。ツイ今じやった」

「へへへ……何と云つて」

「下おろさなければあの小僧をたたき殺すが宜ええかチウてな。胸の処なまくびの生首いれずみの刺青をまくつて見せよつた。ムフムフ」

「へエ。それで……下さないんですか」

船長が片目を静かに閉じたり開いたりした。それからネービー・カットの煙を私の顔の真正面^{ましようめん}に吹き付けた。

「……迷信だよ……」

「それあそうでしょうけどね。迷信は迷信でしょうけどね」

「ムフムフ。ナンセン小僧をノンセンス小僧に切り変えるんだ。迷信が勝つか。俺達の動かす器械が勝つかだ」

「つまり一種の実験ですね」

「……ムフムフ。ノンセンスの実験だよ」

「……………」

二人の間に鉄壁のような沈黙が続いた。船長は平気でコバルト

色の煙をプカプカやり出した。俺は、どうしたらこの船長を説き伏せる事が出来るかと考え続けた。

「君はいつからこの船に乗ったっけなあ」

と船長が突然に妙な事を云い出した。

「一昨年の今頃でしたっけなあ」

「乗る時に機械は検査したろうな」

「しましたよ。推進機スクリュウの切端きっぱしまで鉄槌ハマでぶん殴ってみました

よ。それがどうかしたんですか」

「ムフムフ。その時に機械の間に、迷信とか、超科学の力とか、

幽霊とか、妖怪ばけもんとか、理外の理とかいうものが挟まったり、引

つかかったりしているのを発見したかね。君が検査した時に……」

「それあ……そんな事はありません。この船の機械は全部近代科学の理論一点張りで出来て動いているんですがね」

「いま現在でもそうかね」

「……………」

「そんなら……え宜えじやろ。中学生にでもわかる話じやろ。あの

S・O・S小僧がたいふう颶風や、スパウト竜巻や、リーフ暗礁をこの船のコース前途に招

びよ寄せる魔力を持ちちよる事が、合理的に証明出来るチウならタツ

タ今でもあの小僧を降す」

「……………」

「元来、物理、化学で固まった地球の表面を、物理、化学で固めた船で走るんじやろ。それが信じられん奴は……君や僕が運用す

る数理計算が当てにならんナンテいう奴は、最初^{はな}から船に乗らんが宜^ええ」

俺はギューと参つてしまった。一言^{いちごん}ない……面目^{めんぼく}ない……
と思つて残念ながら頭を下げた。

「ムフムフ。シツカリし給^{たま}え。オイオイ伊那一郎……S・O・S
……ハハハ。ここだここだ……上^{あが}つち来い」

船長^{おやじ}を探すらしく巨大なバナナを抱えて船長室^{かくだ}を駈出して行く
青服^{きんぎょ}の少年^{こども}を船長^{おやじ}は手招きして呼び上げた。俺が買つて来た西^{チベツ}蔵^ト紅茶の箱を、鼻の先に突^つ付けて命令した。

「これを船長室^{ケビン}へ持つて行^いて蒸留水で入れちくれい。地獄の親方
と一所に飲むけにナ」

「CAPTAIN」と真鍮札しんちゆうふだを打った扉ドアを開くと強烈な酸類、アルカリ類、オゾン、アルコオルの異臭においがムラムラと顔を撲うつ。その中に厚硝子張あつガラスばり、櫟材オークざいの固定薬品棚、書類、ビーカー、レトルト、精巧な金工器具、銅板、鉛板、亜鉛板、各種の針金、酸水素瓦斯筒ガス、電気鎔接機ようせつ、天秤てんびん、バロメータなんぞが歯医者か理髪店の片隅ようかみたいにごちゃごちゃと重なり合っている……というのがこのアラスカ丸の船長室なんだ。その片隅の八日巻の時計の下おれくぎの折釘メキシコに、墨西哥かケンタツキーの山奥あたりにしかないようなスバラしく長い、物凄ものすごい銀色の拳銃が二挺ちよう、十数発の実弾を頬張ほおばったまま並んで引つかかっているのだ。

話は脱線するがこのアラスカ丸の船長はむろん独身生活者で、

女も酒も嫌いなんだ。上陸なんか滅多にしないんだ。その代りに応用化学の本家本元の仏蘭西フランスの大学で、理学博士の学位を取っている一種の発明狂と来ているんだ。持っているパテントの数すうでも十や二十じゃ利かないだろう。みんなこの実験室でヒネリ出したっていうんだから豪勢なもんだろう。去年の冬だっけが、そんなパテントの権利も、巨万の財産も海員擁済会ようさいかいに寄附して、胃癌いがんで死んじゃったが、惜しい人間だったよ。……その時分……昭和二年頃には、小型な、軽い、無尽蔵に強力な乾蓄電池の製作に夢中になっていたっけ。世界中の動力を蓄電池の一点張りにするてんで、誠に結構な話だが、その実験をするたんびに、船中の電動力を吸い集めて、電燈を薄暗くしちまったりヒューズを飛ばした

りするのには降参させられたよ。おまけに舶来の絹巻線きぬまきせんが気に入らないと云つて、自分で器械を作つて絹巻線を製作しては切り棄すて、作つては切り棄てる事二万哩マイル。その仕事に行き詰まると、今のピストルを二挺持つて上甲板じょうかんばんに駈かけ上る。主 檣メインマストに群がる軍艦鳥を両手でパンパンと狙い撃ねらにして「アハハハハ」と高笑いしながら、落ちて来るのを見向きもしないでスタスタと実験室に引返ひきかえすという変りようだからトテモ吾々われわれ凡俗よりつには寄付けない。恐ろしく小面倒な動力の計算書なんかを一週間ばかりで書き上げて甲板デッキに持つて行くと、「アリガトウ」と云つて、見る片端かはしから一枚一枚海の風に飛ばしてしまう。……ナア二、タツタ一目でみんな頭に入れちゃうんだ。ズツト後のちになつて船体検査な

んかが来ると自分で機械の側へ立って、何百という数字を暗記で
ペラペラ並べるんだから、計算した本人が舌を捲まいちまう。……
そうかと思うと独逸ドイツの潜航艇やエムデンの出現時間と、場所をギ
ツシリ書き入れた海図を睨にらんで「モウわかった。彼奴等きやつらの根拠地
と、通信網と、速力がわかった」と云うとその海図をクシヤクシ
ヤにして海へ飛ばす。それから毛唐けとうの嫌う金曜日金曜日に汽笛を
鳴らして、到る処の港々を震しんがいさせながら出帆しゅつぱんする、倫
敦ンから一氣に新嘉坡シンガポールまで、大手を振って帰って来る位の離れ
業わざは平氣の平左なんだから、到底吾々われわれのアタマでは計り知る事
の出来ないアタマだよ。

そうした一種の鬼氣すこみを含んだ船長の顔と、部屋の隅でバナナを

切っている伊那少年の横顔を見比みくらべると、まるで北極と南洋ほど感じが違う。

毬栗いぐりの丸い恰好かつこうのいい頭が、若い比丘尼びくにみたいに青々として

いる。皮膚の色は近頃流行のオリーブオリーブって奴だろう。眼の縁ふちと

頬ほおがホンノリして唇いぢごが苳まっげみたいだ。睫毛まつげの濃い、張りのある二ふたえ

重瞼まぶた、青々と長い三日月眉まゆ、スツキリした白い鼻筋、紅あかい耳みみた

朶ぼの背後うしろから肩へ流れるキャベツ色の襟筋えりすじが、女のように色

つぽいんだ。青地に金モールの給仕服ユニフォームが身体からだにピッタリと吸付すいつ

いているが、振袖ふりそでを着せたら、お化粧をしなくとも坊主頭のま

んま、生娘きむすめに見えるだろう。なるほど毛唐けとうが抱いてみたがる筈

だ……と思っているトタンに、白いバナナの皿を捧げた小僧がク

ルリとこつち向きになつて頭を一つ下げた。俺の顔を、あわ憐れみを乞うようにソツと見上げた。それから恋人に出会つた少女みたいな桃色の、悩ましげな微笑を一つニツコリとして見せたもんだ。

俺はゾツとしてしまったよ。……まったく……魔物らしい妖氣が、小僧の背後のうしろ暗闇から襲いかかつて来たように思つたもんだよ。

俺は紅茶もバナナも良い加減にして故郷の地獄……機関室へ歸つて来た。今にも「オホホホ」と笑い出しそうな人形じみた小僧の、あいきようづら変態的な愛嬌顔と向い合っているよりも、機関室の連中の真黒な、づら猛獣面と睨み合っている方が、ドレ位氣が楽だか知れないと思つて……。

ところが機関室に帰ってみると船員の伊那少年に対する憎しみが……否、^{いな}恐怖が、予想外に酷い^{ひど}のに驚いた。船長^{おやじ}が是非ともあの小僧を乗組ませると云うんならこつちでも量見がある……というので大変な鼻息だ。水夫^{デッキ}連中は沖へ出次第に小僧を餌^{つっこ}にして鱻^{ふか}を釣ると云っているそうだし、機関室の連中は汽罐^{ボイラ}に突込んで石炭の足しにするんだと云ってフウフウ云っている。海員なんでものはコンナ事になると妙に調子付いて面白半分にドンナ無茶でも遣^やりかねないから困るがね。現に水夫の中でも兄い分の「向^{むこ}う疵^{きず}の兼^{かね}」がわざわざ鉄梯子^{ばしご}を降りて、俺に談判を捻^ねじ込んで来た位だ。

「向う疵の兼」というのは恐ろしい出歯でばだから一名「出歯兼でばかね」ともいう。クリクリ坊主の額おでこが脳天から二つに割れて、又喰付くいき合あった創痕きずあとが、眉まゆの間へグツと切れ込んでゐるんだ。そいつが出でばばうちようばばうちよう刃包丁くわを啣くわえた女の生首なまくびの刺青ほりものの上に、俺達の太股ももぐらいある真黒な腕を組んで、俺の寝台ねだいにドツカリと腰おろを卸して出ツ歯でばをグツと剥むき出したもんだ。

「チョットお邪魔しますが親方おやじア。今、船長の処ところへ行つて来たんでがしよう。親方おやじア」

「ウン。行つて来たよ。それがどうしたい」

「すみませんが船長おやじがあの小僧の事を何と云つてたか聞かしておくんない。……わっしや親方おやじが船長に何とか云つたらしいんで、

デッキ
水夫連中の代表になって、船長の云い草を聞かしてもらいに来たんですが」

「アハハハ。それあ御苦労だが、何とも云わなかったよ」

「お前さん何にも船長おやしに云わなかったんけエ」

「ウン。ちよつと云うには云ったがね。何も返事をしなかったんだ。船長おやしは……」

「ヘエー。何も返事をしねえ」

「ウン。いつもああなんだからな船長おやしは……」

「あの小僧でえしを大事にしてくれとも何とも……親方に頼まなかったんけえ」

「馬鹿。頼まれたって引受けるもんか」

「エムプレス・チャイナへ面^{つら}当てにした事でもねえんだな」

「むろんないよ。船長^{おやじ}はあの小僧を、皆^{みんな}が寄^{たか}つて集^{たか}つて怖^こがるのが、氣に入らないらしいんだ」

「よしッ。わかつたッ。そ^{おやじ}んで船長^{りようけん}の了^{りようけん}簡^{りようけん}がわかつたッ」

「馬鹿な。何を云うんだ。船長^{おやじ}だつて何もお前達の氣持を踏み付^おけて、あの小僧を可愛^おがろうつてえ了^お簡^おじやないよ。今にわかるよ」

「インニヤ。何も船長^{おやじ}を悪^おく云うんじやねえんですがす。此^{うち}船^おの船^お長^{やじ}と来た日にや海の上の神様^おなんで、万に一つも間違^あいがあるうたあ思^しわねえんですがす、癪^{しゃく}に障^{さわ}るのはあの小僧^おでがす。……手^て前の不吉^いな前科^{こうら}も知らねえでノメノメとこの船^ふへ押^おしかけて来^きや

がったのが癪に触^{さわ}るんで……遠慮しやがるのが当^{あたり}前^{まえ}だのに……ねえ……親方……」

「それあそうだ。自分の過去を考えたら、遠慮するのが常識的だが、しかし、そこは子供だからなあ。何も、お前達の顔を潰^{つぶ}す気で乗った訳じゃなからう」

「顔は潰れねえでも、船が潰れりや、おんなじ事でさあ」

「まあまあそう云うなよ。俺に任せとけ」

「折角だがお任せ出来ねえね。この向う疵^{きず}は承知しても他^{ほか}の奴^{やつ}等^らが承知出来ねえ。可^{かわ}哀^い相^{そう}と思うんなら早くあの小僧^{おろ}を卸^{おろ}してやつておくんなさい。面^{つら}を見ても胸^む糞^{なくそ}が悪^{わる}いから」

「アツハツハツ。恐ろしく担^かぐじゃねえか」

「担ぐんじやねえよ。親方。本気で云うんだ。この船がこの棧橋を離れたら、あの小僧の生命いのちがねえ事ばかりは間違いねえんで……だから云うんだ」

「よしよし。俺が引受けた」

「へエ。どう引受けるんで……」

「お前達の顔も潰れず、船も潰れなかったら文句はあるめえ。つまりあの小僧の生命いのちを俺が預かるんだ。船長が飼っているものを、お前達めえたちが勝手にタタキ殺すつてのは穏やかじゃねえからナ。犬でも猫でも……」

「へエ。そんなもんですかね。へエ。成る程。親方がそこまで云うんなら私等あつしらあ手を引きましようが、しかし機関室こっちの兄貴達に、

先に手を出されたら承知しませんよ。モトモトあの小僧は甲板組デツキの者もんですからね」

「わかつてるよ。それ位の事ことあ」

「ありがとうゴンス。出娑婆でしゃばった口を利用して済みません。兄貴達も容赦して下せえ」

と会釈をして兼は甲板へ歸つた。生命いのち知らずの兇き状よう持もちば

かりを拾い込んでゐる機関部へ来て、これだけの文句を並べ得る水夫は兼の外には居ない。現に機関部の連中は、私の寢室へやの入口一パイに立塞たちふさがつて、二人の談判に耳を傾けていたが……むろんデツキ野郎の癖に、わざわざ親方の私の処へ押しかけて来る兼の利いた風な態度を憎んで、今にも飛びかかりそうな眼付めつきをしな

がら扉ドアの蔭ひしめに犇ひしめいていたものであるが、兼が「兄貴達も容赦してくれ」と云つて頭をグツと下げた会釈ぶりが気に入つたらしく、皆顔色を柔らげて道を開あけて通してやつた。平生ふだんなら甲板ちりから塵一本、機関室へ落し込んでも、只ただはおかない連中であるが……。

そんな訳で、風前の燈ともしび火ともしびみたような小僧の生命いのちを乗せたアラスカ丸が、無事に上シャンハイ海ハイを出た。S・O・Sどころか時化しけ一つ喰くわずに門司もじを抜けて神戸に着いた。それから船長おやじ一流の冒険ぼうけんだが六時間の航程コースを節約つめるために、鳴戸なるとの瀬戸の渦巻トシを七千噸の巨体で一氣に突切つて、御本尊のS・O・S・BOYを慄ふるえ上げらせながら平氣の平左で横浜に着いてしまった。

横浜で印度綿花インドと南洋材を全部上げてしまふと、今度は晚香
 坡バユキ行の木綿類を吃水きつすい一パイに積込つみこむ。同時にアラスカ近海の
 難航海に堪え得るだけの食料や石炭すみを、船が割れる程突込つっこむ訳だ
 が、その作業は平生いつもの通り二三日がかりで遣るのでさえ相当忙し
 いのに、向岸むこうぎしの晚香坡バンクーバから突然だしぬけに大至急うんぬん云々の電報が
 来て、二十四時間以内の出帆しゅつぱんという事になったので、その忙
 がしさといったら話にならない。おまけに横浜市内の道路工事の
 影響おかげとかで、臨時人夫エキストラが間に合わないと来たので、機関部の石炭すみ
 運びなんかは、文字通りの地獄状態に陥ってしまったものだ。
 それも一口に地獄と云っただけじゃ局外者しろうとにはわからないだろ
 う。普通の客船メイルボートは別であるが、外国通いの気の利いた荷物カゴボ

船ボートになればなるほど、荷物をウンと詰め込まれる。人間の通れ

る……荷役の出来る処ならばどこでも構わない。空隙すきまのあらん限

り押し込んでしまうので、石炭を積む処は炭庫すみぐら以外に殆んど無

いと云つていい。そこへ今度のアラスカまわりみたいな難航路に

なると必要以上の石炭を積んでおかないとドンナ海難にぶつかつ

て、どこへ流されるかわからないので、楕円形の船の胴体と、四

角い部屋部屋が交錯して作っているあらゆる狭い、人間の通れな

いような歪ゆがみ曲つた空隙くうげきに石炭をギツシリと詰め込まなければな

らない。その作業の危険さと骨の折れる事といったら、それこそ

この世よの生き地獄と云つても形容が足りないだろう。この船の料

理部屋の背後うしろの空隙なんかへ行く連中は、ドン底の水槽タンクの鉄蓋てつふた

まで突き抜けた鉄骨の隙間すきまに、一枚の板を渡して在る。左右の壁
 には火のような蒸気スチームの鉄管パイプが一面にぬたくつてあるので、通り
 抜けただけでも呼吸いきが詰まって眼がまわる上に、手でも足でも触
 れたら最後大火傷おおよけどだ。そこに濛々もうもうと渦巻く熱気と、石炭の粉
 の中に、臨時に吊つるした二百燭光しよくの電球のカーボンだけが、赤い糸
 か何ぞのようにチラチラとしか見えていない。そこを二三度も石
 炭籠みかごを担いで往復してから急に上甲板じょうかんばんの冷めたい空氣に触れ
 ると、眼がクラクラして、足がよろめいて、鬼のような荒くれ男
 が他愛なくブツ倒たおれるんだ。ところがブツ倒たおれたと見ると直
 ぐに、兄イ連れんが舷側ふなばたに引ひきずり出して頭から潮水しおみずのホースを引
 っかけて、尻ペタを大きなスコップでバチンバチンとブン殴るん

だから、息のある奴なら大抵驚いて立ち上る。

「見やがれ。コン畜生^{ちくしょう}。死^{くた}ばるんなら手際よくクタバレ」

といった調子である。残酷なようであるが、限られた人数^{にんず}で限

られた時間に仕事をしなければ、機関長の沽券^{こけん}にかかわるんだか

ら止^やむを得ない。所謂^{いわゆる}、近代文明^{いんげん}って奴の裡面^{りめん}には到る処にこ

うした恐ろしい地獄が転がっているんだ。勿論、俺自身が、その

中からタタキ上げて来たんだから部下に文句は云わさないがね：

…。

その俺が横浜棧橋のシヨボシヨボ雨の中に突立って、積込^{つみこ}む石

炭を一々検査していると汗と炭粉で菜葉服^{なっぱふく}を真黒にした二等機^{セカ}

関土^{シンド}のチャプリン髭^{ひげ}が、喘^{あえ}ぎ喘^{あえ}ぎ駈け降りて来て「トテモ手が足

りません。何とかして下さい」と云うんだ。

「馬鹿。そう右から左へ人が雇えるか」

と一いっかつ喝すると「それでもデツキの方で誰か一人でもいいんで

すから」と泣きそうな顔をする。

「馬鹿ツ。デツキの方だつて相当忙がしいんだ。殴られるぞ」

「……でも船長室のボーイが遊んでいます」

「あんな奴が何の役に立つんだ」

「……でも、みんなそう云っているんです。この際、紅茶のお盆なんか持ってブラブラしている奴はタタキ殺しちまえて……」

「君から船長にそう云い給え」

「ドウモ……そいつが苦手なんで」

「よし。俺が云つてやろう」

忙がしいのでイライラしていた俺は、二等運転手チャプリンの話が五月蠅うるさかつたんだらう。そのまま一気にタラップを馳かけあが上あがつて、船長室に飛込んだ。船長は相も変わらず渋紙色の無表情な顔をして、湯気の立つ紅茶を啜すすっていた。傍の鉛なまりば張りの実験台の上で、問題の伊那少年が銀のナイフでホットケーキを切っていた。

俺は菜葉服のポケットに両手を突込んだまま小僧の無邪気な、ういういしい横顔をジロリと見た。

「この小僧を借してくれませんか」

伊那少年の横顔からサツと血の気が失うせた。魘おびえたように眼を丸くして俺と船長の顔を見比みくらべた。ホットケーキを切りかけた白

い指が、ワナワナと震えた。……船長も内心愕然^{ぎよつ}としたらしい。飲みさしの紅茶を静かに下に置いた。すぐに云った。

「どうするんだ」

「石炭^{すみ}運びの手が足りないって云うんです。みんなブツブツ云っているらしいんです……済みませんが……」

「臨時は雇えないのか」

「急には雇えません。二十四時間以内の積込^{つみこ}みですからね。明日^{あした}の間^まになら合うかも知れませんが……皆^{みんな}モウ……ヘトヘトなんで

……」

船長の額^{ひたい}に深い豎皺^{たてじわ}が這^{はい}入った。コメカミがピクリピクリと

動いた。当惑した時の緊張した表情だ。こうした場合の、そうし

た船員の気持が、わかり過ぎる位わかつているんだからね。

それから船長は白いハンカチで唇のまわりをていねい丁寧に拭いた。

ソロソロと立ち上つて伊那少年を見下した。伊那少年も唇を真白にして、涙ぐんだ瞳めを一パイに見開いて船長の顔を見上げたものだ。

その時の船長の云うに云われぬ悲痛な、同時に冷え切った鋼鉄のような表情ばかりは、今でも眼の底にコビリ付いているがね。

船長はコメカミをピクピクさせながら大きく二度ばかり眼をしばたたいた。俺の顔をジツと見て念を押すように云った。

「大丈夫だろうな」

俺は無言のまま無造作にうなずいた。

俺と一いっしょ所に静かに、二三度うなずいた船長は伊那少年を顧みて、硝子ガラスのような眼球めだまをギリリと光らした。決然とした低い声で云った。

「……ヨシッ……行けッ……」

「ウワア——アッ……」

と伊那少年は悲鳴を揚げながら船長室を飛出したが……その形容の出来ない恐怖の叫び、悲痛の響ひびき、絶体絶命の声が俺は、今でも思い出すたんびにゾツとする。伊那少年は石炭運びの恐ろしさを知っていたのだ。否、いなソレ以上の恐ろしい運命が、石炭運びの仕事の中に入れ交まじっているのを予感していたのだね。

しかし伊那少年は逃れ得なかった。船長室の外には、俺のアト

から様子を見に来た向う疵の兼が立っていた。大手を拡げて伊那少年を抱きすくめてしまったもんだ。

「ギヤア——。ウワアツ。助けて助けて……カンニンして下サアイ。僕はこの船を降りますから……どうぞどうぞ……助けて工助けてエツ……」

「アハハハ。どうもしねえだよ。仕事を手伝いせえすれあ、ええんだ」

「許して……許して下さいあい。僕……僕は……お母さんが……姉さんが家うちに居るんですから……」

伊那少年は濡ぬれたデツキに押え付けられたまま、手足をバタバタさして泣き叫んだ。

「ウハハハハ。何を吐かすんだ小僧。心配するなつて事……俺が引受けるんだ。この兼が受合うたら、指一本指さしやしねえかんな。……云う事を聴かねえとコレだぞ」

兼は横に在った露西亞製の大スコップを引寄せた。そうして手を合わせて拝んでいる少年を片手で宙に吊した。小雨の中で金モール服がキリキリと廻転した。

「致します致します。何でも致します。……すぐに……すぐに船から下して下さい。殺さないで下さい」

「知ってやがったか。ワハハハハハハハ」

兼は大口を開いて笑いながら私たちを見まわした。船長も二等運転手も、多分俺の顔も石のように剛ばっていた。あんまり兼の

笑い顔が恐ろしかったので……ひたい額の向むこうきず疵までが左右に開いて笑ったように見えたので……。

「……サ柔順おとなしく働らけ。誰も手前てめえの事なんか云つてる奴は居ねえんだからな。ハハハ」

小雨の中に肩をすぼめて艙口ハッチを降りて行く伊那少年の背後姿うしろは、世にもイジラシイ憐あわれなものであつた。

そうして俺達はソレツキリ伊那少年の姿を見なかつたのだ。

いぬぼうさき

きんかざん

犬吠埼から金華山沖の燈台を離れると、北海名物の霧がグ

ングン深くなつて行く。汽笛を矢鱈やたらに吹くので汽罐きかんの圧力計ゲージがナ

カナカ上らない。速力も半減で、能率の不経済な事夥おびただしい。

一等運転手と船長と、俺とが、食堂でウイスキー入りの紅茶を

飲みながらコンナ話をした。

「今度は霧が早く来たようだね」

「すぐ近くに氷山がプカプカやっているんじゃないかな。霧が恐ろしく濃いようだが……」

「そういえば少し寒過ぎるようだ。^{さむす}コンナ時にはウイスキー紅茶に限るて……」

「紅茶で思い出したがアノS・O・Sの伊那一郎は船長が降した^{おろ}んですか」

船長は木像のように表情を剛^{こわ}ばらせた。無言のまま頭を軽く左右に振った。

「おかしいな。横浜以来姿が見えませんか」

「ムフムフ。何も云やせん。あの時、君に貸してやった切りだ」
「ジョジョ冗談じゃない。僕に責任なんか無いですよ。デツキの兼に渡した切り知りませんが、貴方も見ていたでしょう」

「殺^やったんじゃねえかな……兼が」

と云ううちに一等運転手^{チーフメート}が自分でサツと青い顔になった。

「……まさか。本人も降りると云ってたんだから……無茶な事はしまいよ」

「しかし降りるなら降りるで挨拶^{あいさつ}ぐらいして行きそうなもんだがねえ」

「ムフムフ。まだ船の中に居るかも知れん……どこかに隠れて……」

と船長が云つて冷笑した。例の通り渋紙の片隅へ皺しわを寄せて：
硝子球ガラスだまをギョロリと光らして……。俺は何かしらゾツとした。
そのまま紅茶をグツと飲んで立上った。

こうした俺たちの会話は、どこから洩もれたか判然わからないが忽たちまち
船の中へパツと拡がった。

「捜し出せ捜し出せ。見当り次第海にブチ込め。ロクな野郎じゃ
ねえ」

と騒さわぎまわる連中も居たが、そんな事ではいつでも先に立つ例
の向むこう疵きずの兼かねが、この時に限つて妙に落付いて、

「居るもんけえ。飲まず食わずでコンナ船の中へ居おれるもんじゃ
ねえちたら。逃げたんだよ」

と皆を制したのでソレツキリ探そうとする者もなかった。しかし、それでも伊那少年の行方は妙に皆の氣にかかつてしまったらしく、狭い廊下や、デツキの片隅を行く船員の眼はともすると暗い処を覗きまわつて行くようであつた。

船を包む霧は益々深く暗くなつて来た。

モウ横浜を出てから十六日目だから、大圏コースで三千哩近くは来ている。ソロソロ舵をE・S・Eに取らなければ……とか何とか船長と運転手が話し合っているが、俺はどうも、そんなに進んでいるような氣がしなかった。しかもその割りに石炭の減りようが烈しいように思った。これは要するに俺の腹加減で永年の経験から来た微妙な感じに過ぎないのだが、それでも用心のために

警笛を吹く度数を半分から三分の一に減らしてもらった。同時に
一時間八^{ノット}の^{エコノミカルスピード}経^{エコノミカルスピード}速度の半運転を、もう一つ半分に落した
ものだから、七千^{トン}噸の巨体が^{あり}蟻の^は匍うようにしか進まなかった。

「オイ。どこいらだろうな」

「そうさなあ。どこいらかなあ」

といったような会話がよく甲板の隅々で聞こえた。むろん片手を伸ばすと指の先がブーツと見える位ヒドイ霧だから話している奴の正体はわからない。

「汽^{ふえ}笛を鳴らすと矢^や鰐^{たら}にモノスゴイが、鳴らさないと又ヤタラに淋^{さび}しいもんだなあ」

「アリユウシャン群島に近いだろうな」

「サア……わからねえ。太陽も星もねえんだかな。六分儀なんかまるで役に立たねえそうだ」

「どこいらだろうな」

「……サア……どこいらだろうな」

コンナ会話が交換されているところへ、老人の主^{しゅちゆう}厨^{ちゆう}が飼^かっている斑^{まだら}のフォックステリヤが、甲板に馳^かけ上^あつて来ると突然に船首の方を向いてピツタリと立^{たちど}停^とまった。クフンクフンと空中を嗅^かぎ出した。同時にワンワンワンと火の附^つくように吠^ほえ初^{はじ}めた。

「オイ。陸^{おか}だ陸^{おか}だツ」

とアトから跟^ついて来^きた主厨^{しゅちゆう}の禿^{はげ}頭^{あたま}が叫^こぶ。成^なる程^{ほど}、波^{なみ}の形^{かたち}

が変化して、眼の前にボーツと島の影が接近している。

「ウワツ……陸だツ……大變だツ」
おか

「後退……ゴスタン……陸だ陸だツ」
ゴスタン
おか

「大變だ大變だ。ぶつかるぞツ……」

ワアワアワアと蜂の巣を突いたような騒ぎの中に、船は忽ち

ゴースタンして七千噸の惰力をヤット喰止めながら沖へ離れた。

船首にグングンのしかかって来る断崖絶壁の姿を間一髪の瀬戸

際まで見せ付けられた連中の額には皆生汗が滲んだ。

「あぶねえあぶねえ。冗談じゃねえ。汽笛を鳴らさねえもんだか

ら反響がわからねえんだ。だから陸に近いのが知れなかつたんだ」

「機関長の奴ヤタラにスチームを惜しみやがるもんだから……」

テキメンだ」

「今の島はどこだったろう」

「セント・ジヨジやねえかな」

「……手前^{てめえ}……行ったことあんのか」

「ウン。飛行機を拾いに行つた事がある」

「何だ何だセント・ジヨジだつて……」

「ウン。間違えねえと思う。波打際^{なみうちぎわ}の恰好^{かっこう}に見おぼえがあるんだ」

「篋^{べらぼう}棒めえ。セント・ジヨジだったらアリユウシャン群島の奥じ

やねえか」

「ウン。船が霧ん中でアリユウシャンを突^つん抜けて白令海^{ベーリング}へ這^は

入^いっちゃったんだ」

「間^ま抜けめえ。船長^{おやし}がソ^はンナ半間^{はんま}な処^{ところ}へ船^{ふね}を遣^やるもんけえ」

「駄^だ目^めだよ。船長^{おやし}にはもうケチ^{けち}が附^ついてんだよ。S・O・S小僧^たに崇^たられてんだ」

「でも小僧^{せうそう}はモウ居^ゐねえってんじやねえか」

「居^ゐるともよ。船長^{おやし}がどこかに隠^{かく}してやがるんだ。夜中^{よちゆう}に船長室^{せんぢやうしつ}を覗^{のぞ}いたらシツカリ抱^かき合^あって寝^ねてたっていうぜ」

「ゲエツ。ホントウけえ」

「……真^ま実^{じつ}だよ……まだ驚^{おどろ}く話^わがあるんだ。主厨^{かかん}の話^わだがね、

あのS・O・S小僧^{せうそう}ってな女^{おんな}だっていうぜ。……おめえ川島^{よしこ}芳子^{よしこ}ツてえ女^{おんな}知らねえか」

「知らねえね。○○女優だろう」

「ウン……あんな女だっというぜ。毛唐けとうの船長なんか、よくそんな女をボーイに仕立てて飼つてゐるって話だぜ。寢台ねだいの下したの箱に入れとくんだそうだ。自分の喰物くいものを領わけてね」

「フウン。そういうえば理窟がわかるような氣もする。女ならS・

O・Sに違ちがえねえ」

「だからよ。この船の船靈ふなだまさま様ア、もうトツクの昔に腐くさちやつてゐるんだ」

「ああ嫌いやだ嫌いやだ。俺おらアゾオツとしちやつた」

「だからよ。船員みんは小僧を見付次第タタキ殺して船靈ふなだまさま様を淨きよめ
るって云つてんだ。汽罐かまへブチ込めやあ五分間で灰も残らねえつ

てんだ」

「おやじの量見が知れねえな」

「ナアニヨ。S・O・Sなんて迷信だつて機関長に云つてんだそう
うだ。俺の計算に、迷信が這入^{はい}つてると思ふかつて機関長に喰^く
てかかつたんだそうだ」

「機関長は何と云つた」

「ヘエエツて引き退^{さが}つて来たんだそうだ」

「ダラシがねえな。みんなと一所に船を降りちまうぞつて威^{おど}かし
やあいいのに」

「駄目だよ。ウチの船長^{おやじ}は会社の宝物^{ほうもつ}だからな。チツトぐれえ
の気紛^{きまぐれ}なら会社の方で大目に見るにきまつている。船員^{のりくみ}だつて

船長が棧橋に立つて片手を揚げれや百や二百は集まって来るんだ」
おやじ

「それあそうかも知れねえ」

「だからよ。晩香坡バンクーバに着いてつからS・O・Sの女郎めろうをヒヨツ

コリ甲板デッキに立たせて、ドンナもんだい。無事に着いたじゃねえか

つてんで、コチトラを初め、今まで怖がつていた毛唐連中をギヤ
フンと喰くらわせようつて心算つもりじゃねえかよ」

「フウン。タチがよくねえな。事によりけりだ。コチトラ生命いのちが
けじゃねえか」

「まったくだよ。船長おやじはソナナ事が好きなんだからな」

「機関長も船長おやじにはペコペコだからな」

「ウムウム。この塩梅あんばいじゃどこへ持つてかれるかわからねえ」

「まったくだ。計算にケチが付かねえでも、アタマにケチが付
あ、仕事に狂いが来るのあ、おんなじ事じゃねえかな」

「そうだともよ。スンデの事にタツタ今だつて、S・O・Sだつ
たじえねえか」

「ああ。いやだいやだ……ペツペツ……」

コンナ会話を主^{メイン}檣^{マスト}の蔭で聞いた俺は、何ともいえない腐った気
持になって、霧の中を機関室へ降りて行つた。……これが迷信と
いうものかどうだか知らないが、自分の頭の中まで濃霧^{のうむ}に鎖^{とぎ}さ
れたような気になって……。

それから三日ばかりした真夜中から、波濤^{なみ}の音が急に違って来

たので眼が醒めた。アラスカ沿岸を洗う暖流に乗り込んだのだ……と思つたのでホツとして万年寢床の中に起上つた。

同時に船橋から電話が来て、すぐに半運転を全運転に切りかえる。霧笛をやめる。探照燈を消す。機関室は生き上つたように陽気になった。一等運転手の声が電話口に響いた。

「石炭はドウダイ」

「桑港まで請け合うよ。霧は晴れたんかい」

「まだだよ。海路は見通しだが空一面に残ってるもんだから天測が出来ねえ」

「位置も方角もわからねえんだな」

「わからねえがモウ大丈夫だよ。サツキ女帝星座が、ちようどそ

こいらと思う近きんじよ処へウツスリ見えたからな。すぐに曇ったようだが、モウこつちのもんだよ」

「アハハハ。S・O・Sはどうしたい」

「どつかへフツ飛んじやったい。船長おやじは晩香坡バンクーバから鮭さけと蟹かにを積シスコんで桑港ハワイから布哇へ廻わつて帰るんだってニコニコしてるぜ」

「安心したア。お休みい……」

「布哇ハワイでクリスマスだよオオ——だ……」

「勝手にしやがれエエ……エ……だ……」

「アハアハアハアハ……」

ところがこうした愉快的な会話が、霧が晴れると同時にグングン裏切られて行つたから不思議であつた。

夜が明けて、霧が晴れてから、久し振りに輝き出した太陽の下を見ると、船はたしかに計算より遅れている。しかも航路をズツと北に取り過ぎて、バンクーバー 晚香坡とは全然方角違いのアドミラルチー湾に深入りして雪を被つた聖エリアスの岩山と、フェア・ウエザー山の間でガツチリと船首を固定さしているのには呆れ返つた。
……船長と運転手の計算も、又は俺の腹加減までもが、ガラリと外れてしまつていたのだ。
はず

そればかりではない。

船に乗つてアラスカ近海へ廻つた経験のある人間でなければ、あの近海の波の大きさと、恐ろしさはチョット見当が付きかねるだろう。こんな処でイクラほら法螺を吹いても、あの波濤なみのスバラシ

サばっかりは説明が出来ないと思うが、何もかも無い。これが波
 かと思う紺青色こんじょういろの大山脈が、海拔五千米メートル突の聖エリアス山
 脈を打ち越す勢いで、青い青い澄み切った空の下を涯はてしもなく
 重なり合いながら押し寄せて来る。アラスカ丸は七千噸トンだから荷
 物船では第一級の大型だったが、たとい七千噸が七万噸でもあ
 の波に引つかかったら木こつ葉はも同然だ。

一つの波の絶頂に乗上げると、岩と氷河で固めた恐ろしい恰かつこ
 好うの聖エリアスセントが直ぐ鼻の先に浮き上る。文句なしに手が届き
 そうに見える。これは、空氣が徹底的に乾燥しているから、そん
 なに近くに見えるんだが、水蒸氣の多い日本から行くと特別にソ
 ンナ感じがするんだ。望遠鏡で覗のぞいてもチツトかすも霞んで見えない。

山腹を這う蟻^{はあり}まで見えやしまいかと思うくらいハッキリと岩の角々が太陽に輝いている……と思う間に、その大山脈の絶頂から真^まつさかおと逆落しに七千噸の巨体が黒^{くろけむり}煙^{たなび}を棚引^{すべ}かせて送り落ちる。スキーの感じとソツクリだね。高い高い波の横つ腹に引き残して来る推進器^{スクリュウ}の泡をジイツと振り返っていると、七千噸の船体が千噸ぐらいにしか感じられなくなつて来る。

……と思ううちに、やがて谷底へ落ち付いた一刹那^{せつな}、次の波の横つ腹に艦首^{トッブ}を突込んでドンイイインと七噸から十噸ぐらいの波に艦首^{トッブ}の甲板^{デッキ}をタタキ付けられる。グリーンと沈んで甲板をザアザアザと洗われながら次の大山脈のドテツ腹^{もぐ}へ潜り込む。何しろ^{なん}ふなあし船脚^{ふなあし}がギツシリと重い^{やつ}のだから一度、大きな波^{やつ}にたたかれると

容易に浮き上らない。船室ケビンという船室ケビンの窓が、青い、水族館みたいな波の底の光線に鎖とぎされたまま、堅パーテカル板や、内竜骨キールソンが、水圧でもって……キイツ……キイツ……キシキシキシと鳴るのを聞いていると、それだけの水压を勘定に入れた、材ストレングス・オブ料

強・マテリアルス弱の公式一点張りで出来上っている船体だとわかり切つていても決していい心持ちはしない。そのうちにヤット波の絶頂まで登り詰めてホットしたと思う束の間に、又もスクリユウを一シキリ空転さして、潮しおけむり煙まきたを捲立てながら、文字通り千仞せんじんの谷底へ真逆落した。これを一日のうちに何千回か何万回か繰返すと、機関室の寢床ベッドにジツと寝転んでいても、ヘトヘトに疲れて来る。

「オイオイ。機関長か……」

船長室から電話がかかる。

「僕です。何か用ですか」

「ウン。もつとスピードが出せまいか」

「出せますが、何故なぜですか」

「船がチツトも進まんチウて一チーフ等運転手が訴きえて来きるんだ」

「今十六節ノット出ているんですがね。義勇艦隊のスピードですぜ」

「馬鹿。出せと云ったら出せ」

「ドレ位ですか」

「十八ばつか出しちくれい」

「最大フル限ですネ」

「ウン。石炭^{すみ}は在るかな」

「まだ在ります。全速力^{フル}で四五日分……」

「……ヨシ……」

ガチャリと電話が切れたと思うと、やがて船腹^{ふなばら}を震撼^{しんかん}する波濤^{なみ}の轟音^{おと}が急に高まって来た。タツタ二節^{ノット}の違いでも波が倍以上大きくなったような気がする。又實際、船体のコタエ方は倍以上違って来るので、石炭の消費量でもチツトやソツトの違いじゃない。

そのうちに高緯度の癖で、いつとなく日ばボンヤリと暮れて、地獄座のフットライト見たいなオーロラがダラダラと船尾^{スターン}にブラ下った。その下の波の大山脈の重なりを、夜通しがかりで白^{しらあ}

泡を噛みながら昇ったり降ったり、シーソーを繰り返して翌る朝の薄明りになってみると、不思議な事に船体は、昨日の朝の通り聖エリアスとフェア・ウエザーの中間に船首を固定さしている。昨日から固定していたんだか、夜の間に逆戻りしたんだかわからない。

「どうしたんだ」

「シツカリしろ」

とか何とか運転手と文句を言い合っているうちに、昨日の朝の通りの白い太陽がギラギラと出て来た。空気が乾燥しているから岸の形がハッキリしている。山腹を這う蟻の影法師まで見えそうである。

さすが
流石に沈着な船長もコレには少々驚いたらしい。船橋^{ブリッジ}に上つて、珍らしそうに白い太陽を凝視している。その横に一等運転手がカラも附けないまま寒そうに震えている。

「逆戻りしたんだな」

「イヤ。波に押し戻されているんです。十八節^{ノット}の速^{スピード}力がこの波じゃチツトモ利かないんです」

「そんな馬鹿な事が……」

「いや実際なんです。去年の波とは夕チが違うらしいんです」

「おんなじ波じゃないか」

「イヤ。たしかに違います」

一等運転手と船長がコンナ下らない議論をしているところへ、

俺は危険を冒おかして梯子ラダを這い登って行つた。船長は、真向セントいの聖エリアスの岩山に負けない位のゴツゴツした表情で云つた。

「モウ……スピードは出ないな。機関おやかた長……」

「出ませんな。安全弁バルブが夜通しブウブウいつていたんですから」

「……弱つたな……」

この船長が、コンナ弱音を吐いたのを俺はこの時に初めて聞いた。

「……妙ですねえ。今度ばかりは……変テコな事ばかりお眼にかかるじゃないですか」

「あの小僧を乗せたせいじゃないかな。チョットでも……」
と一等運転手がヨロケながら独ひとりごと言ことのように云つた。蒼白あおしろ

い、剛こわばった顔をして……俺は強く咳せき払いをした。

「エヘン。そうかも知れねえ。しかし最早もう船には居ねえ筈だから」

船長は何も云わなかった。苦い苦い顔をしたまま十八倍の双眼鏡を聖エリ阿斯セントに向けた。

三人はそのまま氣拙きまづい思いをして別れたが、それから第三日目の朝になっても、依然としてフエア・ウエザーとセント・エリ阿斯が真正面に見えた時には、流石さすがの俺も、ジイーンと痺しびれ上るような不思議を、脳髓の中心に感じた。同時に何ともいえない神秘的な気持になって、胸がドキドキした事を告白する。自分の魂が、船体と一所に、どうにもならない不可思議な力にガツシりと

掴つかまれているような気がしたからだ。

石のように固こわばった俺と、一等運転手チーフメートと、船長の顔がモウ一度、船長室でブツカリ合った。

「ここいらを北上する暖流の速力が変わったっていう報告はまだ聞きませんよ」

運転手が裁判の被告みたような口調で船長に云った。船長が他よ所事そごとのようにネービー・カットの煙を吹いた。

「ムフムフ。変ったにしたところが、一時間十八節ノットの船を押し流すような海流が、地球表面上に発生し得る理由はないてや」

と飽くまでも科学者らしく嘯うそぶいた。俺もエンチャントレスに火

を付けながら首肯うなずいた。

「とにかく俺のせいじゃないよ。石炭はたしかに減っているんだからな」

チーフメート
一等運転手も眼を白くしてコックリと首肯うなずいた。同時に一層青白くなりながら白い唇を動かした。

「……何か……あの小僧の持物でも……船に……残っているんじゃないでしょうか」

船長は片目をつむつて、唇を歪ゆがめて冷笑した。しかし一等運転手は真顔まがおになつて、真剣に腰を屈かがめながら、船長室内のそこ、ここを覗のぞきまわり初めた。おしまいには船長と俺が腰をかけている寝台ねだいまでも抱え上げて覗いたが、寝台の下には独逸ドイツや仏蘭西フランスの科

学雑誌が一パイに詰まっているキリであつた。ボーイのスリッパさえ発見出来なかつた。

とうとう船全体が、動かす事の出来ない迷信に囚とらわれて、スツカリ震え上がらせられてしまった。乗組員の眼付めつきは皆オドオドと震えていた。

……船が動かない……S・O・S小僧の崇たりだ……。

晴れ渡つた青い青い空、澄み渡つた太陽。静かな、切れるような冷つめたい風の中で、碧へきぎよく玉たまのような大濤おおなみに揺られながらの
海難……。

……行けども行けども涯はてしのない海難……S・O・Sの無電を打つ理由もない海難……理由のわからない……前代未聞の海難

……。

「サアサア。みんな文句云うところアねえ、在りつただけの石炭^{すみ}を
 悉^{みんな}皆、汽罐^{かま}にブチ込むんだ。それで足りなけあ船^{ダン}底^ブの木綿^ロの巻^ロ
 荷^{ール}をブチ込むんだ。それでも足りなけあ俺から先に汽罐^{かま}の中へ匍^は
 い込むんだ。ハハハ。サアサア。みんな石炭^{すみ}運^{すみ}びだ石炭^{すみ}運^{すみ}びだ：
 ……」

事実石炭は最^も早^う、残りがイクラも無かつたのだ。横^は浜^まで積^つ込^みん
 だ時の苦勞を逆に繰返して、飛んでもない遠方から掘り出すよう
 にしいしい、機関室へ拾い集めるのであつたが、その作業を初め
 ると間もなく、残炭^{のこり}を下^{した}検^た分^みに廻^まわつた二等機関士のチャプリン
 髭^{ひげ}が、俺の部屋へ転がり込んで来た。

「……タ……大變です。S・O・Sの死骸が見つかりました」

「ナニ。S・O・S……伊那の死骸がか……」

「エエ。そうなんです……ああ驚いた。ちよつとその水を一パイ。
ああたまらねえ」

「サア飲め。意気地無し。どこに在つたんだ」

「ああ驚いちゃった。料理部屋の背面うしろなんです。あすこの石炭すみの
山の上にエムプレス・チャイナの青い金モール服を着たまんま半
腐りの骸骨になって寝ていたんです。イガ栗頭のかっこう恰好かっこうがあいつ
に違いないんですが」

「骸骨……？……」

「ええ。あそこは鉄管パイプがゴチャゴチャしていてステキに暑いもん

ですから腐りが早かったんでしよう。白い歯を一パイに剥き出してね。蛆うじ一匹居なかつたんですが……随分臭かつたんですよ」

俺は黙つて鉄梯子てつばしごを昇つて、中甲板ちゅうかんぱんの水夫部屋に來た。

入口に掴つかまつて仁王立におうだちちになつたまま大声で怒鳴つた。

「おい。兼公かねこう居るか。出歯でつばの兼公……生首なまくびの兼公は居ねえかア……」

「おおおオ——……」

と隅ツコの暗い寢台棚かいこだなから、寢ぼけたらしい声がした。

「誰だあ……」

「おれだあ……」

「おお。地獄の親方さんか。これあどうも……」

「済まねえが一寸、顔を貸してくれい」

「ウワアア。とうとう見付かったかね」

「シツ……」

と眼顔で制しながら兼公を水夫食堂へ誘い込んだ。天井の綱にブラ下りながら兼に金口煙草を一本呉れた。兼はしきりに頭を掻いた。

「どうも横浜じゃ、警察が怖わーがしたからね。つい秘密にしちやったんで……」

「石炭運びの途中で殺ったんか」

「図星なんで……ヘエ。もつとも最初から殺る気じゃなかったん

で、みんながあの小僧は女だ女だって云いましたからね。仕事にかからせる前にチョット調べて見る気であすこに引っぱり込んだんで……へエ……」

「馬鹿野郎……そんで女だったのか」

「それがわからねえんで……あすこへ捻^ねじ伏せて洋服を引んめくりにかかったら恐ろしく暴れやがってね」

「^{あたりまえ}当^{あた}前^{りまえ}だあ……それからどうした」

「イキナリ飛び付きやがって、ここん処^{ところ}をコレ……コンナに喰^くい切りやがったんで……」

兼^{なつぱふく}は菜葉服とメリヤスの襯衣^{シヤツ}をまくって、左腕の力^{ちからこぶ}瘤^ぶの
上の繃帶^{ほうたい}を出して見せた。

「まだ腫はれてんで……ズキズキしてるんですがね……恐ろしいも
んですね」

「間抜けめえ。そんな時に手前裸てめえはだか体だったのか」

「エヘヘヘヘ」

「変な笑い方をしるねえ。それからどうした」

「わっしやカーツとなつちやつてね。コイツ奴め、降りるといった

って他の船へ乗れあ、又、災難わざをしやがるんだからここで片付け

た方が早道だ。男だか女だか殺おとしてから検査しらべた方が早道だと思っ

ちやつたところへ、血だらけの口をしたS・O・Sの野郎が、私

の横つらツ面へ喰い切った肉をパツと吹っかけて「悪魔」とか何とか

悪態を吐つきやがったんで……手前てめえの悪魔は棚へ上げやがってね。

……おまけに後おとつさんで船長に告訴いいつけてやるから……とか何とか吐ぬかしやがったんでイヨイヨ助けておけないと思つて、首ツ玉をギューツと……まったくなくて……へエ……」

「非道ひどい事をするなあ。そんで女だったかい」

「……それがその……野郎なんで……」

「プツ。馬鹿だなあ。それからどうしたい」

「それつきりでき。……ウンザリしちやつて放ほつたらかして来ちやつたんです」

「何故海なぜに投り込ほうまねえ」

「それが誰にも見つからねえように放り込みたかつたんで……親方ダンブや機関室あにきの兄貴達にも申し訳ねえし、おまけに上シャンハイ海で、あ

つしが談判に行った時に船長おやじが入歯をガチガチさして、こんな事を云ったんです。あの小僧をタタキ殺すのに文句はないが……」

「チョット待ってくれ。たたき殺すのに文句はないって云ったんだね」

「そうなんで……しかし死骸は勿論、髪の毛一本でも外へ持ち出したら只はただおかないぞツ……てね。そう云って船長おやじに白眼にらみ付けられた時にや、あつしやゾツとしましたぜ。あんな気味の悪い面つらア初めてお眼にかかったんで……ヘエ……まったくなんで……」

「フーム。妙な事を云ったもんだな」

「そう云ったんで……何だかわからねえけども……万一見付かつて首になつちや詰まらねえ。事によるとあの二挺ちようのパチンコで穴

を明^あけられちや叶^{かな}わねえと思つて、そのまんまにしたいんです。
まったくなんです」

「案外意気地がねえんだな……手前^{てめえ}は……」

「まったくなんで……それから……というもののあの死骸の事が氣になつて氣になつて今日は運び出そうか、明日^{あす}は片付けようかと思つうちに、だんだん船にケチが附いて来るでしょう……死骸は腐つて手が付けられなくなつて来るし、わつしやもう少しで病氣になるところだつたんで……もう懲^こり懲^ごりました。どうぞ勘^{かん}弁^{べん}しておくんない。あやまつても追付^{おつ}くめえけど……」

「ハハハ。そんな事^{こと}アもうどうでもいいんだ。今日は文句はねえ。手前^{てめえ}行つて大ビラであの死骸^{コツ}を片付けて来い。船長^{おやじ}には俺が行つ

て話を付けてやる」

「へエツ。本当ですかい親方ア」

「同じ事を二度たあ云わねえ」

「……ありが……ありがとう御座ござんす。すぐに片付けます。……

ああサツパリした」

「馬鹿野郎……片付けてからサツパリしろ」

兼はS・O・Sの金モールの骸骨コツを胴中どうなかから真まふた二つにスコツ

プでたたきき截きつて、大きなバケツ二杯に詰めて出て来た。甲板に

出て生命綱いのちづなに掴つかまり掴まり二つのバケツを海の上へ投げ出した

が、その骨の一片が、波にぶつかって、又、兼の足元へ跳ね返つ

て来た時、兼は真青になってその骨を引ひつつか掴あぶなむと危あぶなくツンノメリ

ながら、

「南無阿弥陀仏なむあみだぶつ……」

と遠くへ投げた。

それは兼の一生懸命の震え上った念仏らしかったが、とてもそのかつこう恰好が滑稽こっけいだったので、見ていた俺はたった一人で腹を抱えさせられた。

アラスカ丸は、それから何の故障もなくスラスラと晩香坡バンクーバーへ着いた。

同じ波の上を、同じスピードで……馬鹿馬鹿しい話だが、まったくなんだ。

ところで話はこれからなんだ。

船長の横顔は見れば見るほど人間らしい感じがなくなつて来るんだ。

骸骨^{コッ}を洩紙^はで貼り固めてワニスで塗り上げたような黒光りする凸額^{おでこ}の奥に、硝子玉^{ガラスだま}じみたギラギラする眼球^{めだま}が二個^{ふたつ}コビリ付いている。それがマドロス煙管^{パイプ}を横一文字にギュと啣^{くわ}えたまま、船橋^{ブリッジ}の欄干^{てすり}に両肱^{ひじ}を凭^もたせて、青い青い空の下を凝視しているんだ。その乾涸^{ひから}びた、固定した視線の一直線上に、雪で真白になった晩香坡^{バンクローバ}の栈橋がある。その向う一面に美しい燈火^{ともしび}がズラリと並んでいようという……ところまで、やつと漕ぎ付けたんだがね。文字通りに……。

その棧橋の上に群がっている人間は、五日ほど遅れて着いたア
ラスカ丸をどうしたのかと気づかつて、待ちかねていた連中なん
だ。

「S・O・Sの野郎……骸骨^{ほね}になってまで祟^{たた}りやがったんだナ……」

船長^{おやじ}が突然^{だしぬけ}に振返つて俺の顔を見た。白い義歯^{いれば}を一ぱいに剥^む
き出して物凄^{ものすご}く哄^{こうしやう}笑したもんだ。

「アハハハハ。イヤ……面白い実験だったね。やつぱり理外の理
つて奴は、あるもんかなあ……タハハハ。ガハハハハ……」

青空文庫情報

底本：「夢野久作全集6」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年3月24日第1刷発行

※表題の「難船小僧」には、「S・O・S・BOY」とルビがふられていきます。

入力：柴田卓治

校正：kazuishi

2004年6月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.AOZORA.GR.JP/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

難船小僧

夢野久作

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>